加古川シネマクラブニュース Vol.38　2008.09.04 号

9 月例会は「胡同(フートン)の理髪師」

「映画大学 in 姫路」、「6 周年記念上映会」は無事終了

蒸し暑かった夏も終わり、朝夕にはようやく秋の声が聞こえてきました。今年は、映画大学や上映会など夏に行事が多かったので、関係者はようやく緊張感から放たれたところのようです。

さて、前回にもお伝えしたとおり、会員数の減少が続いており、会の運営に支障が出てきそうです。以前と比べて、新たに入会する人が減っています。会員の皆さんには、チラシを持って帰って、映画の好きな人にお声掛けいただくなど、新入会員が増えるように協力いただきますようお願いいたします。

9 月例会のお知らせ

■名称／第 38 回例会『胡同(フートン)の理髪師』
■日時／9 月 17 日(水)①PM2:00～、②PM4:20～、③PM6:40～
■場所／加古川総合文化センター大会議室(JR 東加古川駅から北へ徒歩 10 分、車は加古川バイパス加古川東ランプ北へすぐ)
■受付／入会手続きが終わっている方は、受付に同封の「例会参加券」をお渡しください。入会手続きを行っていない方は、受付で 4 箇月分の会費(2000 円)を支払い、入会手続きを終えてから、「例会参加券」をお受取りください。

【例会作品データ】
■タイトル／胡同(フートン)の理髪師
■監督／ハスチョロー(哈斯朝魯)
■出演／チン・クイ(靖奎)、チャン・ヤオシン(張耀興)、ワン・ホンタオ(王洪涛)、ワン・シャン(王山)
■データ／2006 年、中国、1 時間 45 分、ドラマ／ヒューマン

【解説】近年、多様化を誇る中国映画界が、万人の心をうつ感動のヒューマン・ドラマを贈りだした。それが「胡同の理髪師」である。

中国・北京の旧城内を中心にそこかしこにある細い路地、胡同(フートン)には、伝統的な建築様式で作られた庶民の古い家屋が建ち並ぶ。生活感に溢れ、古き良き都の情緒漂うスポットとして知られているが、オリンピックを控え、昔ながらの街並みは、そこに住む人の細やかな人情とともに姿を消そうとしている。そうした時代の流れのなかで、胡同の一角に暮らす 93 歳の老理髪師の毎日をドキュメンタリータッチで描き、「豊かに生きる」ことの意味を私たちに問いかけている。

近代化の波が押し寄せる北京の街で、人々の観念や価値観も変化している。主人公のチンお爺さんの顧客は、胡同に住む病気がちの老人ばかり。ひとり寂しく亡くなっていった人、郊外に住む息子と無理やり同居させられた人など。胡同で生活する人々にもいろいろな変化が押し寄せるが、チンお爺さんの日常生活のリズムは全く変わらない。

12 歳から見習いとして働き始め、今なお現役の 93 歳の理髪師だ。そのチンお爺さんの毎日は、朝 6 時に起き、毎日 5 分遅れるゼンマイ時計を直し、銀髪にクシを入れ、身だしなみを整えることから始まる。午前中は三輪自転車で、古くからの顧客の家を訪問しては散髪する。午後は近所の人たちとマージャンを楽しみながら世間話をする。そして決まって夜 9 時には床に就く。映画のほとんどのシーンがチンお爺さんの実生活を映し出している。そして、実在する胡同の生活風景をゆったりとしたリズムで繊細にまた静かに描いている。

老境に入ることの寂しさも抱きながら、凛として自分の生き方を護ろうとするちん爺さんの姿は、高齢化が進む日本でも共感を持って迎えられるに違いない。

監督を務めるのはハスチョロー。内モンゴル出身の逸材で、数多くのテレビシリーズを経て、2000 年に長編第 1 作『草原の女』を発表して以来、そのドキュメンタリータッチの語り口と瑞々しい映像感性が高く評価されている。ここでは古都・北京特有の文化、風土、人情をあぶり出しながら、新しい波が古いものを駆逐していく様を、諦観と痛みを持って描いている。

なによりの話題は、主人公のチンお爺さんを演じるのに、実際に理髪師である 93 歳のチン・クイを据えたことだろう。まさに本人そのままの生活がドラマをかたちづくっているのだ。監督いわく“世界最年長のアマチュア俳優”だが、映画のリアリティの軸となり、その豊かな人間性を画面に焼き付けている。

この他、演者のほとんどが胡同の老人ホームや長屋で見出した人々。チャオ爺の隣のおばさんは、解雇されたトロリーバスの女性運転手。ミー爺を演じているのは読み書きのできない 83 歳の独居老人だった。みなそれぞれのキャラクターを活き活きと演じている。これもハスチョローが

胡同の生活を真摯に描こうする想いの表れである。(「胡同(フートン)の理髪師」オフィシャルサイトから抜粋)

映画大学 in 姫路の報告

初参加の映画大学 in 姫路

私は、3 日間の内 2 日参加し、5 講義を受け、交流会も参加しました。参加者は約 120 数人でした。生(なま)での講義は、講師を身近に感じ、質疑応答などは聴きがたえたっぷりでした。そして交流会は、全国の映画サークル面々の紹介から、お楽しみ抽選会もありで、大いに盛り上がり（私も当たりました）楽しい楽しいひとときでした（中華料理もグー)。時間と参加資金を工面した甲斐がありました。バンザイ！（千）

映画大学 in 姫路に参加して

私は、姫路で行われた映画大学の写真係として 3 日間参加しました。趣味で始めたカメラですが、映画創りのプロに対して失敗できないなーとの思いがありました。開講式からの撮影。講師「岡真理さん」を写すと同時に、話を聞いているうちに緊張も少なくなりました。７人の講師の中で知っている方が、山田洋次監督と俳優の加藤武さん（知っているといっても映画・TV のなかですが)、映画評論家の山田和夫さん（多少の本は昔に読んでいたほど）ぐらいで、岡真理さん、大田直子さん、山下敦弘さん、伊藤千尋さんと名前を聞いていてもわからなかったのですが、それぞれの講義を聞く中で、映画などに対する「想い」「個性」「アピール」が強く感じてきました。この姫路で「映画創り」を「生」で聞き、驚きとともに参加された方の熱心な態度にも感激をしました。自分なりの撮影ができ、参加して本当に良かったと思いました。(山本芳明)

6 周年記念上映会の報告

8月24日に加古川総合文化センターで、6周年記念事業として『夕凪の街 桜の国』の上映会を実施しました。蒸し暑さも少し今年の夏を代表する酷暑の日でしたが、約230人にご来場いただき、なんとか終了ことができました。ありがとうございました。

この作品は、こうの史代の同名マンガを佐々部清監督により実写映画化したもの。原爆投下から13年後と、現代に生きる二人の女性の物語を通して、戦争がもたらした深い傷跡を映し出している。麻生久美子と田中麗奈が好演し、被爆した女性の苦しみと被爆者の癒えることのない痛みが伝わり、戦争と命の尊さを考えさせるというはっきりとしたメッセージが伝わってきた。

1回目と2回目の上映会の間に開催した、映画評論家の山田和夫さんの講演会では、自らの戦争体験をふまえ、戦時中と戦後の異様な社会を振り返り、強く反戦を訴えるとともに、その後の日本の映画史を、さまざまなエピソードを交え、わかりやすく説明いただいた。会場には、多くの方が残って、熱心に聴講していた。

井筒和幸監督にお会いして

7 月 26 日、加古川夏季大学の講師として、加古川に来られた、井筒和幸監督とお話しする機会がありました。

井筒監督の講演中でも触れられていましたが、今は次回作（時代劇だそうです！意外な気がしますよね！？）の準備中で、構想を練って、色々調べている段階だそうです。「時代は、江戸中期、享保の頃の江戸城下の庶民の生活をリアルに描く」そうで、映像の端々、細部にまでこだわり、時代考証を入念にしている、とのことでした。どんな映画を撮られるのか！？いまから期待大！楽しみです！

監督とは一時間程お話したのですが、話題が尽きず、まだまだ話足りない様子で、映画のことから政治、社会について、幅広く熱く語られた姿が、強く印象に残っています。

眼光鋭く、社会批判する様子は、TV 等で見る“井筒監督そのもの”といった感じで、話している方の目をじっと見て、お話されるので、間近に居たこともあり、すごく迫力があり、圧倒されました！怖かったです。

少し緊張したけれど、楽しくお話できた、貴重な時間になりました。ありがとうございました。(晴子)

前回例会の報告

7 月 11 日の例会では、美しい色彩映像で知られるミッシェル・オスロ監督によるフランスのファンタジーアニメーション『アズールとアスマール』を鑑賞しました。

参加会員 112 人。アニメーションが苦手な人もいると思いますが、そうでない人にとっては、美しい映像とわかりやすいストーリーが、懐かしく、また、新鮮な印象が残ったようでした。

ご意見をお待ちしています

映画の感想や意見など、このニュースへ記事をお寄せください。200～300 字程度にまとめていただければ助かります。おすすめ作品をファックス、メールや例会会場のアンケート用紙でお知らせください。

加古川シネマクラブ　〒675-0101
加古川市平岡町新在家 752-46 B-313 山本方
TEL 090-9283-0435　FAX 078-935-8528
E-MAIL cinemaclub@nifty.com
http://homepage3.nifty.com/cinemaclub

会員数 180 人(7 月 11 日現在)